

601

人づくり 国づくり

約20年の間、企業や医学界の求めに応じ、約2万人に接見し、ヘッドハンターとして人材を見極め、橋渡し役を務めてきた。

武元 康明 サーチファーム・ジャパン会長 (半蔵門パートナーズ社長)

「大局観」持つ人材の育成必要に



たけもと・やすあき 石川 県生まれ。著書に「ヘッドハンターはあなたのどこを見ているのか」など。48歳。

俯瞰する力が求められるようになった。語学はできた方が良いし、創造的な思考力の育成などはこれまで日本が欠けていた部分でもある。

その一方で、評価される人材に共通するのは「心・技・体」が備わることと指摘する。

特に、企業が求めているのは「心」の部分。教育界での「心」とはややニュアンスは異なり、これを「人物」と置き換える。人格、人間性、常識性、動機が重要な構成要素だ。

このうち、例えば人格は、

知力、創造力、プランを描き資源を最適配分できる「What構築能力」、構築されたことを円滑に運用できる「How能力」、心が折れない胆力、包容力など幅広い。「これらをバランス良く持っていることが大切」という。

こうした各要素が「技」をつかさどる。「技」そのものは時代の変遷とともに、更新可能であり、更新する志は「心」にある、という捉え方である。

ただ、社会全体では、経済学という2002の法則]のように、リーダーとしての資質があるのは2割。今後、どう育成していくか。

「資質も大切だが、環境

次回は内桶博仁・茨城県坂東市教委教育長

も重要。その意味で、学校教育は大切な場。これまでの活動や社会的な事象から学び、たどり着いたのが「教育界にも『ヤジロベエ』の思考が必要」という持論。例えば、語学力よりもコミュニケーション能力が大事だと思えるのは、あれかこれかの二項対立の20世紀型の発想だが、右手に語学力、左手にコミュニケーション能力を持った上で、グローバル人材とは何かを考えるのが、21世紀型の発想という。その姿が「ヤジロベエ」に似る。正反対の価値観を取り込むことで、大局観につながる21世紀型の思考ができる」

日本語は元来、二項対立を生まない言語の下、文化を育んだ。「21世紀型の思考」を促す意味では、日本の強みと見る。

いというニーズが増しているからだろう。

「世界のグローバル化に伴い、1990年代は語学力が求められた。しかし、今は、精神的に強いこと、コミュニケーション能力やチャレンジ精神、主体性などの資質・能力が切望されている」

時代を経て「国際化」や「グローバル化」の定義も

変わってきたという。かつては、「その国」をよく知る、駐在経験者などが求められた。日本と相手国、という一対一の関係で良かったからだ。だが、現在、一対地球上の各国と、まさに関係はグローバル化した。

「複数国を対象に大局観を持って、形勢判断をしてアクションプランを起こしていく。創造的な思考力や